

やっぱり群馬に入植民はいなかった

— 交流と人の移動の観点から —

友 廣 哲 也

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|-----------------|---------------|
| 1. はじめに | 6. 群馬の「市」の流通網 |
| 2. 群馬県域の弥生時代社会 | 7. 入植民はいなかった |
| 3. 鉄の移動 | 8. 入植とは |
| 4. 『魏志倭人伝』と弥生時代 | 9. 小結 |
| 5. 弥生時代の群馬県域 | 10. さいごに |

— 要 旨 —

群馬県の弥生時代から古墳時代の実相は、いまだに解明されていないと筆者は考えている。筆者は以前より、群馬県の古墳時代・文化は、群馬県以外に入植民が作ったものであるという定説に反対している。この問題に対して様々な角度から検討を続けてきた。筆者は以前より土器や遺物、「モノ」の移動から交流の事実が認められ、当時の県内外の集団との間に交易があったことを指摘した。また『後漢書東夷伝』、『魏志倭人伝』の記載から弥生時代の農耕社会が、いかに戦乱にあふれていた時代であったことを、西日本の遺跡で確認した。また倭国と同じト骨の風習が、高崎市内の遺跡で、行われていたことを指摘した。土器だけではなく、共通する多くの「モノ」と習慣が群馬にも存在していた。『魏志倭人伝』には倭国の中には国があり、「市」があると記載されている。それを管理・維持する人がいたと書かれている。筆者は当時の群馬県域に「市」があったことを証明した。「市」の経済社会、流通網から見ても、入植民が来て群馬県域に、古墳王国・社会を構築したという根拠は見当たらない。弥生時代後期、「市」に保管されている「モノ」の中に鉄剣、鹿角製の柄の存在も指摘した。様々な角度から検討して、群馬県に入植民は存在していない。例えば、東海系のみ土器構成を持った出土遺物を持つ竪穴建物、ほとんど確認できない。事実とはさまざまな地域の土器と、在地の土器が共伴出土する。入植民の入植地は、高崎市井野川流域とされている。周辺は弥生時代中期に水田耕作が始まり、以来古墳時代前期にかけて多くの遺跡が継続存在している。弥生時代から古墳時代前期は卑弥呼が死んだ頃にあたる。『魏志倭人伝』には卑弥呼の死後、倭国内は乱れ、「相誅殺」しあう戦乱の時代である。群馬県域では戦争・戦闘を示す受傷人骨の出土はない。入植民の故地は東海地方西部とされているが、井野川流域から直線距離で350～400kmある。入植説に立てば井野川流域に住んでいた群馬の人たちは、土地を守ることなく、今まで先祖代々何百年も丹精込め、水田とした土地を入植民にあげてしまったことになる。『魏志倭人伝』によれば倭国には「馬・牛・虎・豹・羊・鵲」がいないと記載されている。今群馬をはじめとし、国内の遺跡からは熊・鹿・猪・狼の骨が多数出土している。入植民は昼夜となく熊や狼に襲われる危険に身をさらし、命を懸けて歩いてこななければならない。群馬の「市」には鉄剣をはじめ弓、鏃などの武器も沢山監理・保管されていた。入植民は何のために「相誅殺」の中を、他国を侵犯しながら、戦闘を繰り返し、命がけで井野川流域をめざしたのか。筆者は長年入植説を否定してきた。ここでも同じ立場から検証したい。

キーワード

対象時代 古墳時代初頭
対象地域 弥生時代の群馬県域
研究対象 入植民

1. はじめに

群馬県の研究者は現在の群馬県域の古墳時代、文化は外来の人が作り上げたものと考えている。つまり群馬の古墳王国を作ったのは群馬の人ではないとしている。こうした考えは、今では一般の県民の方々にも浸透している。いわゆる入植民説である。筆者は以前より入植民説には賛同できず、様々な形で検討を加えてきた(友廣2003・2015・2017等)。弥生時代の社会背景や、大勢の人が移動する行程や土器の制作、移動の形態、当時の社会構造を検討してきた。入植民説は群馬県内の土器構成が東海系の土器であることを根拠としている。しかし、現在では弥生時代から古墳時代前期にかけて、汎日本に他地域の土器が出土することは当たり前のこととして受け入れられている。群馬県内で石田川遺跡出土土器を、石田川式土器と命名する機運が高まっていた頃、大塚初重、小林三郎は太田市内の高林遺跡の調査を踏まえ、長野県や関東周辺にS字状口縁台付甕をはじめ、複数他地域の土器が出土することを指摘し、時期、形式認定にはまだ弥生土器と土師器が混じる類例を求めてからという慎重な態度を示していた(大塚・小林1967)。

近年では土器の移動について、多くの論考があり、ほとんどすべてが遠・近距離間の交流の存在を前提とした論考が多い。それらの内容は近隣社会同士のグループ間の交流・交易の存在の検証がテーマである。その中で土器の量比だけでなく、在地化する土器の存在も交流の存在と指摘する研究者が多い(中居和志2016)。筆者も他地域の土器が出土する理由は入植民がいたということではなく、他地域との交流があった証拠であると考えている。近隣同士の「市」を往来し、近距離間の交流が繰り返され、遠距離の土器や「モノ」が運ばれてくると考えている。群馬で東海地方の土器があることから東海地方からの入植とされ、すでに50年を超えている。50年以前にどのような過程を経て、入植民説が生まれたのかを簡単に示したい。

1952年、石田川遺跡が発見された。同年11月京都大学人文科学研究所の日本考古学協会、第10回総会研究発表会において、群馬大学尾崎喜佐雄により、概要が報告された。口頭による追加発表のため、要旨は残っていない。

1968年、石田川遺跡報告書中で松島榮治はS字状口縁台付甕について「広く類例を求めたが、わずか九州に少々類似したものがあると聞くのみであった。」とした。石田川遺跡出土土器は当初弥生土器とされ、群馬県の弥生時代後期、樽式土器と並行する弥生土器とされ、同時期に並行して、全く異なる弥生土器様式があるとされた。勿論文化も異なり、お互いが牽制しあう文化とし、異なった出自とした。このため松島は石田川式土器という弥生土器を持つ集団は、群馬のものではなく、朝鮮半島をも視野に入れた入植民とした。

その後、S字状口縁台付甕が伊勢湾沿岸に出自を持つ

土師器とわかり、石田川式土器は弥生土器ではなく古墳時代前期土師器と認定された。群馬の研究者は、樽式土器より新しい時期を当てた。

1971年、梅澤重昭は『土師式土器集成』で石田川式土器を土師器と認定し、入植説を提唱した。また東海の人々は東京湾を船で遡上したという説をだした。

1971年、尾崎喜佐雄は『前橋市史第1篇古代』で入植民の規模や構造に触れてこれを支持した。

1981年、田口一郎は『元島名将軍塚古墳』で、石田川式土器を土師器と認定し、入植民の故地は、東海西部安濃川周辺とした。入植後も母集団とは密接に行き来をしたとした。さらに入植は長時間をかけ、継続的に続き、その間母集団とは継続的に交流が続いたとした。

1990年、松島榮治・梅澤重昭・井上唯雄・松本浩一らは『群馬県史』で入植民の存在を認め、第4・5章を担当し、石田川式土器をもった人々が開拓集団として無住の曠野に広く入ってきたとした。

この後、県史をはじめ、市町村史にも同様な論考が増え、一般の県民にも広まっていくのである。

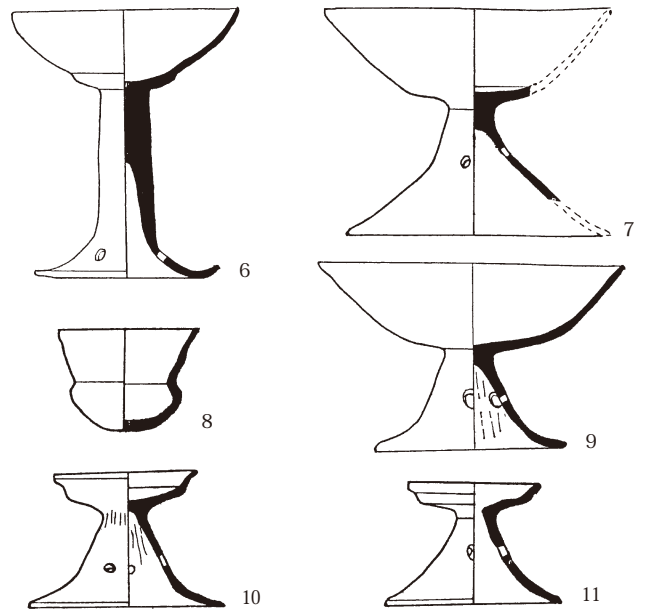
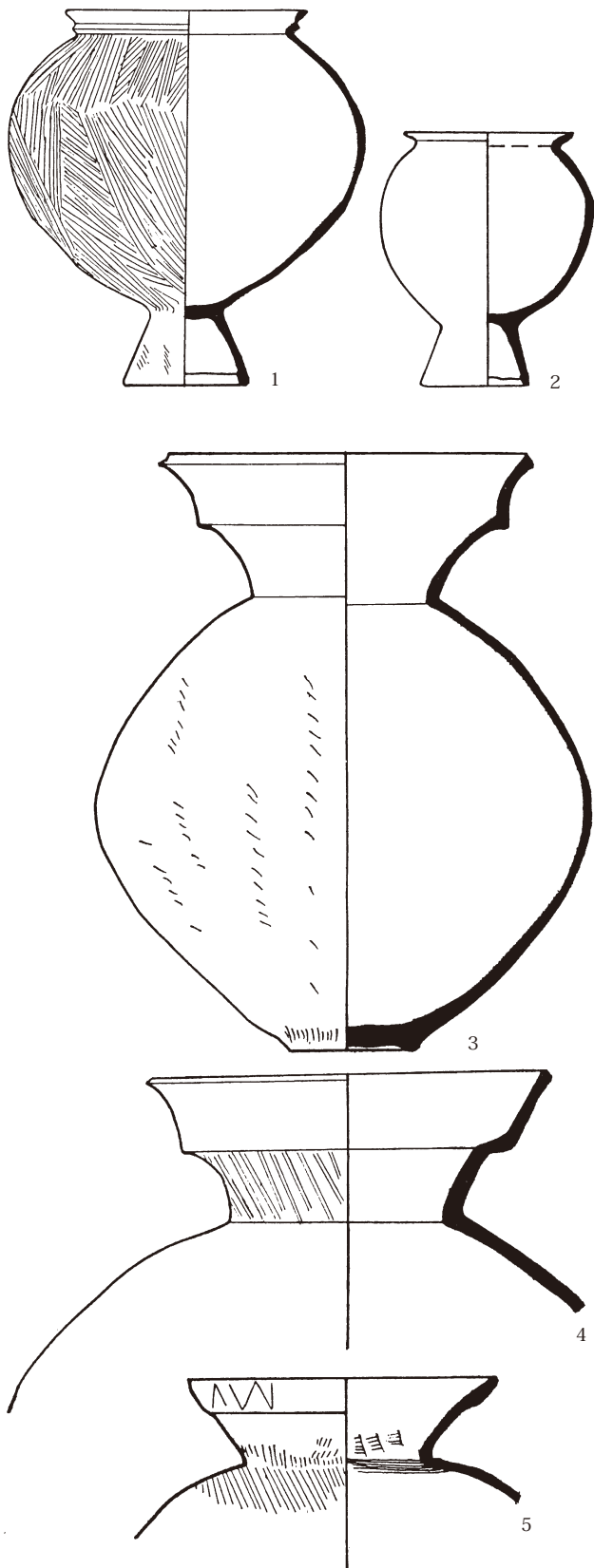
1999年、深澤敦仁は『群馬県遺跡大事典』で東海地方西部からという田口の入植説を支持した。

2007年、若狭 徹は「井野川流域に東海西部の手法を比較的よく守っている外来系土器が多いこと、外来の情報が直接的かつ継続的であることの現われである」として田口の入植説を支持し、入植地が井野川流域であるとした(若狭2007)。

これ以後、入植民の母集団は東海西部にあり、入植地は井野川流域という骨格が固まった。

五領遺跡の発見調査から土師器研究が進み、岩崎卓也、玉口時雄、櫻井清彦、小出義治、甘粕 健、久保哲三らは石田川式土器を土師器とし、五領遺跡の成果から弥生時代から古墳時代への土器変化の過程には弥生時代末期から古墳時代の間に、弥生土器と土師器が混在する時期があることを指摘した。前述の大塚・小林の指摘も同じである(大塚・小林1967)。群馬県内研究者も土師器と認定した。しかし、群馬県の多くの研究者は樽式土器と石田川式土器の両文化は全く異なる出自集団であるとし、樽式土器と石田川式土器文化は全く関連がないという理由で、入植説が継承されていった。入植民の出自は東海西部で、入植地は井野川流域とされ、定説となって50数年が経過した。群馬県史では無住の曠野に石田川式土器をもった、外来の人々が開拓集団として、群馬に來たというものであったが、S字状口縁台付甕の出自が東海西部地域にあるということがわかると、東海西部から井野川流域に入植民が來たということになった。

ここで筆者は群馬県の入植民の問題を取り上げ、交流・交易の問題を合わせて検討したい。



第1図 石田川遺跡出土土器

2. 群馬県域の弥生時代社会

群馬県域を含めた関東地域は、どんな社会であったのかを考えてみたい。弥生時代の規定は水田耕作とされている。しかし、東日本では群馬県を含め、水田耕作の開始は弥生時代中期後葉ということが近年の発掘調査で明らかになってきている。

群馬県では弥生時代前期から中期中葉は、山麓部に土坑等が確認されている。中期後葉になると集落は、水田耕作を開始するため平野部に展開していく。水田加耕地の確保と水利、さらには集団の力が必要になるからである。用排水路の整備や水田の耕作には、多くの人の力が必要となるからである。湿地帯の微高地には人が集まる集落が展開する。人が多くなれば共同作業が始まり、統率する人間が現れる。集団が複数化すれば集団間の軋轢が生まれ、一般的には余剰生産品をめぐる争いが生まれるとされる。

鳥取県青谷上寺地遺跡では、90体に及ぶ殺傷人骨等が確認され、佐賀県吉野ヶ里遺跡の甕棺墓に首のない遺体が埋葬されている。

高橋龍三郎は集団の連合・統合には戦争は不可欠であるとする（高橋 2001）。橋口達也は戦争の原因は水田耕作社会内の土地争い、水争いで発生するとしている（橋口 2007）。筆者も農耕社会の構造は、集団同士の軋轢のレベルの中で生まれてくるものであると考える。多くの余剰を求めれば、広い土地、多くの人、良品の工具等が必要となる。また交流、交易のシステム、ある程度の規則、約束事がないと余剰ではなく、過剰品になってしまうと考えるからである。それは各集団のリーダーの権限のレベルにも表れてくるだろう。農耕社会では、自分の集団

ここまで鉄・樫・板材・鹿角・ト骨用の猪・鹿の肩甲骨など「市」の交易品や管理品を上げたが、もちろん土器が多数出土している。出土土器は長野県の栗林式土器、後期から古墳時代前期にかけては、北陸系土器、新潟系土器、畿内系土器、東海系土器、近江系受口状口縁土器も確認されている。

中居は近江系土器の分布を詳細に調査し、北陸、日本海側一帯に出土することを示し、受口状口縁を持つ土器が山城地域、伊勢地域、美濃地域などで出土し、各々の地で在地化していると指摘した。「受口状口縁土器は、古墳出現期にいち早く広域に拡散する土器であり、濃尾平野の八王子小宮式をはじめ各地の土器様相に大きな影響を与えた土器である。」とした(中居2016)。

弥生時代末から古墳時代前期は各地で土器が移動する時期であるが、各地に在地化するということは近隣同士との交流の深さを示していることがわかる。近江の受口状口縁土器が在地化することは、筆者は周辺同士の交流、交易が密接になり、互いに行き来をしたことを示していると考えている。新保地域から出土した多くの交易品とともに鉄器はあまり多くはないが、注目すべきは鹿角製の柄である。鹿角を削ったり、木器を作ったりするには鉄製の工具があったことが考えられる。また柄だけではなく中子の目釘穴を合わせるためには、剣自体が無いと製品にはできない。群馬県では弥生時代後期になると、新保地域からはなれた場所で鉄剣の出土が認められる。鉄剣は有馬遺跡礫床墓から、同渋川市内の樽舟遺跡で竪穴建物から出土している。北町遺跡では鉄製品が確認され、利根川を遡上した沼田市石墨遺跡周溝墓から鉄剣が出土している(水田・石北1985)。高崎市八幡遺跡の礫床墓から鉄剣が出土している(神戸聖語1989)。豊島直博の研究で、群馬県や東日本の出土鉄剣の多くは鹿角製の柄を装着している(豊島2005)。豊島は詳細に柄の制作方法から分類を行い時期と使用法を検証した(豊島2005・2010)。新保地域では、鉄剣に使用された柄は製品とともに未製品、未加工の鹿角本体も存在する。新保地域で柄を制作し、板材、木器等の制作に鉄器が使用されたことが想定され、新保地域には鉄製工具があったことが考えられる(註4)。

鉄が来たルートを筆者は北九州から山口県響灘沿岸の綾羅木郷遺跡を中心とした遺跡群、鳥取県青谷上寺地遺跡、妻木晩田遺跡、石川県八日市地方遺跡、新潟県上越市裏山遺跡等と考えている。各地域に大きな遺跡が分布している。この日本海ルート上に大きな集落が分布している。やがて上越市を南下し、長野、群馬と考えている。大まかなルートではあるが、筆者は九州と群馬県をつなぐ日本海ルート上には上記の遺跡群が存在し、交流を維持する拠点集落と考えている。今後、新たに拠点集落が発見される可能性は高いと言える。

このルートは半島を始発とし、北九州へと到着する。やがて東へ運ばれる。

滋賀県彦根市に2016年10月の新聞報道で鍛冶集落の稲部遺跡が確認され、隣接する守山市にある環濠集落下之郷遺跡、伊勢遺跡等と合わせ、下長遺跡では、舟を操る集団の存在が指摘されるなど大きな集団が想定される。日本海ルートと下之郷遺跡は、琵琶湖を舟で南下し、日本海ルートと、畿内をつなぐルートと指摘でき、今後が期待される。上越市の北、柏崎市西岩野遺跡では独立胸持柱を持つ建物が確認された。この遺跡も拠点となった遺跡の可能性が強い。

このようにみると日本海ルート上に、拠点となる遺跡群が確認できる。また琵琶湖唯一の湖から流れ出る瀬田川は南下し京都に入り、宇治川となる。やがて西流し大阪に入ると淀川になる。淀川はやがて大阪湾に注ぐ。大阪湾に入ると西に淡路島があり、鍛冶集落の五斗長垣内遺跡が存在する。

秋山浩三は近畿地域の「モノ」の移動、交流の実態を検討し、各地域の土器の交流を検証した。生駒山西麓産土器搬入をa～dの4類型に分類し、さらに時期の問題を検討した。その中でa類型は弥生前期から中期に移住に伴う土器の交流とした。貯蔵、供膳、煮沸甕の3形態のうち、煮沸形態が確認できることから人間の移動と評価し、移住を含むとした。人間の移住・移動の視点は弥生時代前期、新たな農耕可耕地の水田開発を指摘している。移住の範囲は南山城・北山城・南丹波・北丹波・丹後である。秋山は時代が下がると徐々に土器の内容物の交換、庄内式期には交易品と変化していくことを論証された(秋山2017)。

農耕社会が始まると、人は小家族、個々に生業を営むということが難しくなってきた。狩猟生活のように最低家族単位でも生きてはいけたが、農耕社会の開始期はまず複数の家族が集まり、やがて集団となっていく社会である。農耕社会の始まりは今までの社会から大きく様変わりした。大勢の人間が集団となり、協業が進み、用排水路の掘削や農作業の協力が不可欠である。さらに集団が大きくなればなるほど生産力が上がり、多くの農具を保有し、鉄器を持つことができるようになる。さらに集団が大きくなればなるほど多くの農地が必要となる。このため戦闘が始まったと考えられている。青谷上寺地遺跡の90体に及ぶ殺傷人骨はその戦いを物語っている。「100点を超える人骨は無秩序に出土し、亡くなってすぐ埋められたものではない」(井上貴央2009)(註5)。

戦闘は集団同士の戦いで、戦いを有利に進めるにはリーダーがいて全体を統括する必要がある。やがて勝ち抜いた集団の統率者は権力と余剰品を手に入れることになる。さらに余剰品を交換するための交渉も必要となる(高橋2001)。

秋山の土器の分析から、弥生時代の農耕社会の開始期にはのちの五畿のうち隣り合わせの国の中での移住・移動の可能性を指摘している。これは近隣周辺の普段の交流が密であったことに由来すると筆者は考える。この地域では以前より、交流・交易が近隣同士で頻繁に継続し、新たな地に移住したと考えることが出来る。農耕社会では戦闘で勝った集団は負けた集団を奴隷にするか、働かせ生産物を取り上げたと考えることができる、もちろん戦闘での死者もいた。橋口は戦争後の捕虜を奴隷とし、これを『魏志倭人伝』にある生口と指摘した(橋口2007)。また仁藤淳史も中国の用例を上げて示した(仁藤2016)。

筆者は秋山の指摘した山城から丹波・丹後にかけての移住を可能にしたのは、すでに安定した社会間での密接な交流があったと考えている。集団間の交流は大きく深くなり、リーダーは新たな農耕集団を取り入れ、移動を容認したと筆者は考えている。

一方鳥取県の青谷上寺地遺跡では殺傷人骨が出土し、渡来系弥生人の形質を持っていることが分かった(井上2009)。集団の民族的な詳細は井上が示し、殺傷人骨の出土は弥生時代に戦闘が確かにあったことを示している。

4. 『魏志倭人伝』と弥生時代

白石太一郎は邪馬台国を中心にする倭国は大和にあるとする。さらに『魏志倭人伝』で邪馬台国に従わない狗奴国は東海地方愛知県にあるとした(白石2018)。大和では殺傷人骨の出土は少なく、筆者は秋山が指摘したように東山城・丹波・丹後では新しい農地開拓にあたり、以前より交流がある集団と話し合い、一緒に社会をつくることが了解されていたと考えている。大和周辺地域はすでにまとまっていたのがわかる。その理由が殺傷人骨の少ないことであると考えられる。交流は密になり、住み分けとは違うものだったのではないか。集団同士がお互いを理解し、話し合い、集団として移住を受け入れたのだろう(秋山2017)。畿内の研究者は纏向遺跡を邪馬台国とする論者も多い。最近では下之郷遺跡を中心とする近江説も出てきている。数年前には静岡県の高尾山古墳が3世紀前半に比定され、邪馬台国論争も活発になっている。さらに倭国30国の範囲も議論が進んでいる。独立胸持柱も下之郷遺跡や伊勢遺跡、新潟県柏崎市西岩野遺跡にも確認され、話題として挙がるが、まだどこまでが倭国の範囲かはわかってはいない。

ここまで「モノ」の移動、交流・交易や移住の可能性を示したが、人の移動の形態が問題となる。『魏志倭人伝』に倭国の道の記載がある。朝鮮半島からの道のりである。「初めて一海を渡ること千里。対馬国(現長崎県対馬)に至るその大官を卑狗といい、副を卑奴母離という。居するところ絶島にして、方四百余里ばかり。土地

山険にして森林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり。良田なく、海物を食して自活し船に乗って南北に市擢す。」

「初めて土地は(対馬国)山が険しく深い森林が多い。道は鳥や鹿の獣道のように細い。」ここでは国の大官と副官が存在している。

末盧国(現在佐賀県唐津市周辺)では「末盧国に至る。四千余戸がある。山海に濱いて居す。草木茂盛し、行くに前人をみず。」(草木が茂り、前を歩く人が見えないほどである。)(水野 祐1998・以下同じ)対馬は絶海の孤島と記され、平野が無いところである。「良い田はなく、海産物を食べて自活、船で各地に行き市擢をしている。」市擢とは米を交易して手に入れることである。このように当時は他の国との交流が確認される。「初めて土地は(対馬国)山が険しく深い森林が多い。道は鳥や鹿の獣道のように細い。」当時の倭国内の国同士の関係がわかる。また各々の国には大官と副官が存在している。

山城・丹波・丹波間も同じように交流をしていたことが理解できる。当時の社会背景は各国には大官の存在と副官等の上級階級の一団がいたことがわかる。『魏志倭人伝』に記載された卑弥呼の時代は、3世紀前半、弥生時代後期である。30国の倭国王が卑弥呼だった時代である。少し年をさかのぼってみると『後漢書東夷伝』には桓帝・靈帝の間に倭国が大いに乱れ、攻め合い倭国には王がいなかったことが記されている。桓帝と靈帝の間は146～189年のことを指し、日本では弥生時代中期後半にあたる。その大乱を収めるため、卑弥呼が倭国王として擁立されたわけである。卑弥呼が倭国王であった時代が弥生時代後期にあたり、『魏志倭人伝』に描かれているわけである。

その中では各国には王がいて、副官がいる。身分制社会が存在している。「下戸、大人と道路に相逢わば、逡巡して草に入る。辞を伝え、事を説くには、或は蹲り、或は跪き、両手を地に拠せて、之を恭敬とす。対応の声には「ああ」と曰う。おおむね然諾の如し。」集団の内部にも上下関係が確立していたことがわかる。「祖賦を収むるに邸閣あり。国々に市ありて、有無を交易し、大倭をして之を監せしむ。女王国より以北は、特に一大卒を置きて、諸国を檢察せしむ。諸国之畏たんす。常に伊都国に治す。」邪馬台国の王であり、倭国王の卑弥呼のもとに統一されている。卑弥呼を中心にし、倭国内での制度と集団内の上下関係も決まっていた。「卑弥呼以て死す。(中略)更に男王を立つるも國中服せず、更に相誅殺す。時に当たりて千余人を殺す。」卑弥呼が亡くなったのは3世紀の中頃と考えられている。弥生時代末から古墳時代の始まる頃にあたる。卑弥呼が亡くなると国が乱れ、「相誅殺」が始まったと記載されている。今まで連合していた国同士が戦いを始めた時である。このような混乱の中、

群馬県の社会はどのようなものだったのだろう。「女王国の東、海を渡ること千余里。また国あるも、皆倭種なり。」

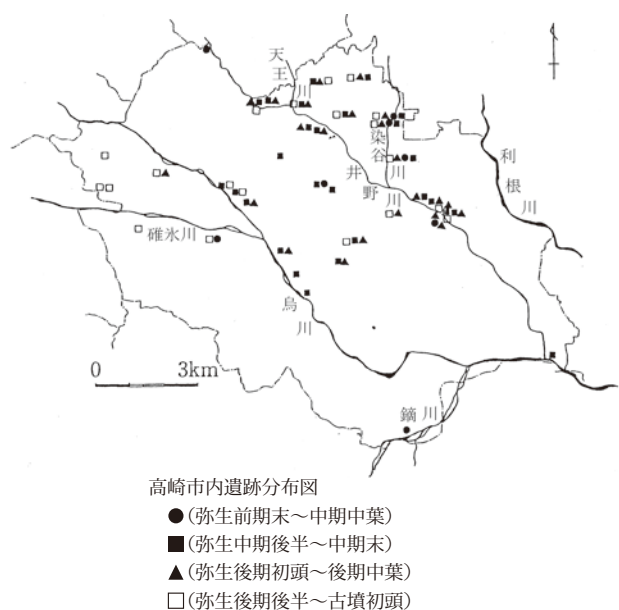
倭国以外にも倭種の国があるという記載があり、倭国以外にも同種の国があることを示している。

5. 弥生時代の群馬県域

弥生時代の群馬県域はどのような社会であったのだろうか。

群馬県域は関東平野の北西に位置し、水田耕作がおこなわれていた。県域内には弥生時代中期から広い範囲で農耕集落の遺跡が分布している。また高崎南部の井野川流域も弥生時代中期～古墳時代前期の遺跡が多数確認されている。現在に至るまで群馬の穀倉地帯である。新保地域は染谷川の傍にあり、やがて染谷川も井野川に流下する。新保地域も広義の井野川流域にあたる。

筆者は新保地域が「市」の機能を持っていたと判断した(友廣2015)。新保地域は弥生時代中期後葉から古墳時代前期へ継続する遺跡群である。筆者は新保地域で、遺跡の出土品から「市」としての機能を確認した(友廣2003a・2015)。略述すると、鉄剣の柄の製作所、多くの鹿角を備蓄していること。鹿角だけでなく板材の制作備蓄、木器の制作備蓄、猪と鹿の肋骨をまとめて備蓄している。鹿角は落角だけでなく生きていた鹿を、捕獲したものが混じっていることがわかっている(宮崎重雄1993・金子浩昌1994)。さらにニホンオオカミの歯などが出土している。また樗やクヌギ等、樹種による農具の選択使用、多くの土器の出土、弓材もイヌガヤが多量に出ていること、石鏃、骨鏃が出土している。このことから筆者は「市」と確認した(友廣2003・2015)。



第3図 高崎市周辺弥生時代遺跡(高崎市史引用(一部改変))

さらに群馬県内では東海系土器のS字状口縁台付甕も出土している。藤根 久・今村美智子は県内出土のS字状口縁台付甕の胎土を分析し、出土品から胎土を調べ産地同定した。その中で藤根・今村はS字状口縁台付甕の胎土から県内複数ヶ所の土を確認した(藤根 久・今村美智子2001abc)。ここでは藤根・今村が分析した、元総社西川遺跡と波志江中宿遺跡のS字状口縁台付甕を比較したい。藤根・今村は元総社西川遺跡の竪穴建物群から出土するS字状口縁台付甕の胎土が、榛名山系の異なる場所の土であるとした。12号竪穴建物の中のS字状口縁台付甕は群馬県の弥生時代後期、樽式土器壺と共伴している。入植民存在の理由とされる東海系のS字状口縁台付甕を主体とする東海地方の土器構成ではない。しかし、土器を分析した大木紳一郎はS字状口縁台付甕が東海系の技術であるとして、入植民のムラの可能性を示唆している。伊勢崎の波志江中宿遺跡では粘土採掘坑の遺構が確認され、その坑の中からS字状口縁台付甕が出土した。周辺の遺跡から、この遺跡と同系統の土でできたと思われるS字状口縁台付甕が出土している。周辺遺跡からは東海から来た人たちの甕とされるS字状口縁台付甕が出土するが、同胎土の平底甕も出土している。齋藤利昭は前橋市にある『横手早稲田遺跡』のS字状口縁台付甕胎土に片岩が含まれることを上げ、片岩の産地が藤岡市周辺にあることを示した。つまりS字状口縁台付甕の胎土は複数個所の土が確認されているのである。これらがどう動いてきたかは、集団同士の交易が考えられるのである。これが意味するものは入植民が来た時に、交易ができる供給網が機能していたことを表している。在地の複数の土でできたS字状口縁台付甕が出土し、離れた場所で出土することは中居が指摘したように群馬で、すでに在地化していたことを示している。

ではこれらのS字状口縁台付甕は入植民が作ったのだろうか。入植民は群馬に来たと同時に瞬く間にどこにどんな土があるかを瞬時に発見し、そこへ赴き集落をつくり採掘坑を掘り、焼き上げ、それを供給網に乗せたのだろうか。もし入植民が来て井野川流域の集落へ入ってくれば戦闘となるだろう。そうならず「市」の供給網を使いS字状口縁台付甕を供給できるだろうか。榛名山系の複数の土で焼かれたS字状口縁台付甕は、元総社西川遺跡で樽式土器と共伴している。在地の土でできたS字状口縁台付甕が大量に流通することは、S字状口縁台付甕がすでに在地化していたことを示している。入植民がいたとすると、すぐ群馬県域をくまなく踏査したのだろうか。小人数で他国内を移動すれば、殺傷されるか弓矢を射かけられるだろう。農耕社会では常道である。見つければどうなるか分かっていたはずである。少人数では動けないだろう。彼らは常に大勢で動いたのだろうか。井野川流域ではなく、波志江地域に土を掘る採掘坑で操業

を始めたのだろうか。もちろん波志江地区も水田地域である。入植民は瞬間にすべてを奪ったのか。群馬中の在地弥生人をあつという間に追い払ったのだろうか。しかし、新保地域の「市」はしっかり機能している(註6)。

前述のとおり、弥生時代中期に始まった水田耕作は、やがて弥生時代他集団との交流を深め、古墳時代に入ると様々な文化や「モノ」の交流が「市」を基軸として活発になった。「市」を基軸とした供給網は、在地化したS字状口縁台付甕を提供している。整理すると、入植があった時とは弥生時代の末から古墳時代初頭、卑弥呼が亡くなり、倭国は大いに乱れ、「相誅殺」をするとされる時期にあたる。県内の研究者らが呼ぶ入植民とは、東海西部地域から群馬へ来たとしている。そして彼ら入植民は現在の高崎市井野川流域に定着するというものである。根拠は東海地方で生まれたS字状口縁台付甕が増えたという点にある。

石田川遺跡報告書が刊行された後、S字状口縁台付甕が東海・伊勢湾沿岸地域の土器であることが分かった。以来東海から大勢の入植民が来たということになった。入植民の故郷は東海地方西部とされた。東海西部安濃川は、現在の三重県津市周辺である。井野川流域から直線距離で350kmから400kmある。『魏志倭人伝』には「倭国には牛・馬・虎・羊・鵲」はいないと記載されている。入植民たちはこの距離を歩くしかないのである。近年の発掘により、弥生時代の独立胸持柱を持つ掘立柱建物跡が滋賀、石川、新潟等に確認され、弥生時代の国を想起させている。邪馬台国畿内説では奈良県纏向遺跡が比定され、滋賀の下之郷遺跡なども国として注目を集めている。前述のように滋賀県では鍛冶炉を多数検出した稲部遺跡も確認されている。また白石が指摘するように愛知県が邪馬台国と対立していた狗奴国という説も以前より根強い。沼津の高尾山古墳が3世紀中ごろに比定され、卑弥呼に並行する時期とされ、沼津市に国を想定する意見もある。東海西部を旅立った入植民たちは東に向かい狗奴国、高尾山古墳周辺を中央突破し、神奈川県内には弥生時代中期から農耕集落の中里遺跡があり、横浜周辺にも多くの環濠集落が展開している(小倉淳一2017)。邪馬台国と対立し、従っていなかった狗奴国を撃破することは可能だろうか。

それぞれ各地に国の存在が想定される中350kmから400kmを徒歩で進むわけである。時期は卑弥呼が亡くなり、「相誅殺」の最中である。さらに国や集落を避ければ道はなく、道中には熊、猪、鹿、二ホン狼等昼夜を問わず待ち構えているのだ。入植民たちは道中、夜もゆっくり眠れない。また他国の領地を侵犯すれば殺されるか、奴隷にされる危険を冒して、何故、何を求めて井野川流域をめざすのか。400km近くを徒歩で進み、狗奴国をはじめとし、強大国と戦闘を行い、すべてに勝利しなければな

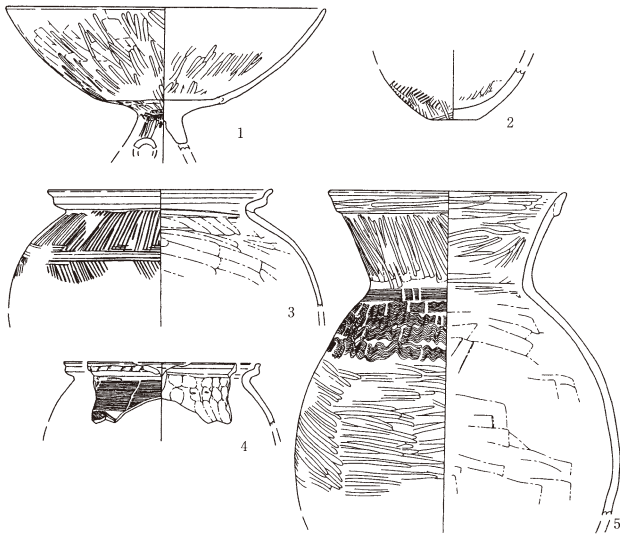
らない。常勝の結果、奪い取った国と土地を捨て、さらに井野川流域まで徒歩の旅を続けたのである。戦いといった国を統治しなかったのである。まっすぐ東に向かえば、狗奴国、高尾山古墳の静岡、神奈川の遺跡群、日本海ルートをとれば下之郷遺跡、石川に行けば八日市地方遺跡、新潟には裏山遺跡等々の国を侵犯していくのである。さらに長野に入れば、すぐに群馬に連絡が入るだろう。長野も黙って通すわけにいかないだろう。一つの国と対抗できる戦士の数、それに伴う武器、自然の猛獣たちからの防御、いったい何人の人が移動したのだろうか。さらに群馬の研究者は継続的な長期の交流があったとするが、継続的な交流とは何度も行き来したということだろうか。S字状口縁台付甕をもってきたと指摘もあり、膨大な人数が「相誅殺」を繰り返しながら当時の列島を徒歩で大移動したのである。土器を持ち、命のやり取りを繰り返した入植民たちの目的は何だったのだろうか。一方では、S字状口縁台付甕はすでに群馬で在地化している。そもそも井野川流域を知っている人がいたのだろうか。井野川流域にかれらを受け入れる知己を持っていたのだろうか。いずれにしても命を懸けた長旅を終えた彼らに、群馬の人たちは土地を与え、食料を与え、水を分け、彼らに頭を下げ、古墳文化と土器をいただいたのだろうか。入植説に立つとすれば、井野川流域の人たちは350kmから400kmを歩きとおし、連戦連勝の軍団を迎え入れ、古墳時代を創造してもらったのだろうか。この移動距離は生駒山系から密接な交流を結んでいた人たちが、山城に集落で移住した程度では測り知れない距離と規模である。『魏志倭人伝』には、道細く、獣道のように、道草木繁茂し、前を行く人が見えずとの記載がある。道を歩けば他国との衝突につながり、道以外を歩けば迷い、獣との命のやり取りが待っている。何を頼りに歩く方向を測ったのだろうか。入植民は何を望んで350kmから400kmを超える道を歩き、草木に覆われ前も見えない道を歩き、森や山を越えたのだろうか。何が彼らを井野川流域に向かわせたのだろうか。入植民は命がけの戦闘を何度も何度も繰り返し、すべての戦闘に勝利し、井野川流域に向かい歩いてきたのだろうか。

6. 群馬の「市」の流通網

さて上記のような社会情勢の中、全く土地勘のない井野川流域に大勢の入植民たちは定住したのだろうか。その前に、歩きとおせたのだろうか、或いは受け入れてもらえたのだろうか。新保地域をはじめ多くの集落の人々は農地を守り、「市」と供給網を守ろうとしなかったのだろうか。

入植民は瞬く間に藤岡から伊勢崎、榛名山系を抑え、S字状口縁台付甕製造を始め、群馬の古墳文化を作り上げたのだろうか。入植説に立てば井野川流域の多くの集

落民を追い払い、農地を奪い、群馬県古墳王国の基礎を作り上げたのである。土器を持って、獣から身を守りながら、他国を横切り膨大な時間をかけて何人の人が井野川流域にたどりついたのだろうか。入植説に立てば入植民は到着したとたんに井野川流域に定着し、群馬の政治権力を奪ったということになる。

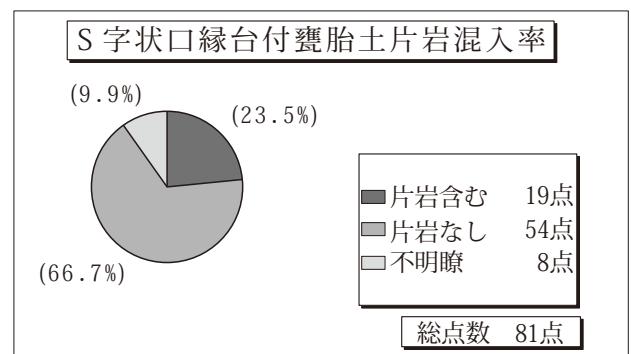


第4図 元総社西川遺跡12号住居跡出土遺物(1/6)

ここで「市」としての機能を再検討してみたい。前橋市元総社西川遺跡12号竪穴建物で樽式土器と2個体のS字状口縁台付甕が共伴して出土した。報告書中大本は遺跡の住人たちは入植民であると示唆している(大本2001)(註7)。筆者が指摘したいのは12号竪穴建物では、S字状口縁台付甕と樽式土器が共伴している。彼らは新しい土地に来て全く軋轢もなく群馬の地に同化したということなのだろうか。新しい土地に来て、その土地の樽式土器を「市」で入手し、使ったのだろうか。また当時の群馬の人たちは新来の彼らを受け入れ、同じ集落内に迎え入れ、新しい人たちを村の中に入れ、樽式土器を提供し、S字状口縁台付甕を与えたというのだろうか。藤根・今村はこの12号竪穴建物出土の2個体のS字状口縁台付甕の胎土を榛名山系の2か所の異なった粘土の使用を示した。つまり、元総社西川遺跡でつくられていないことを示唆している。もし粘土が異なった地の土であれば、彼ら入植民は榛名山系のどこに行けばS字状口縁台付甕と樽式土器をつくる粘土があるかをすでに承知していたことになる。そうでなければ彼らに在地の人が教えたことになる。波志江中宿遺跡の粘土採掘坑が検出され、採掘坑の中からS字状口縁台付甕が出土している。周辺からは土器を焼いた痕跡は確認されていないが、近隣の波志江一帯の遺跡から、中宿遺跡の同種の粘土を使用したS字状口縁台付甕や平底甕の出土が確認されている。

すでにS字状口縁台付甕は在地化しているわけである。これも入植民のしたことなのだろうか。齋藤は横手早稲田遺跡報告書で藤岡産の粘土には片岩が混じるということ指摘した。その片岩が混じる粘土のS字状口縁台付甕が確認されているとした。片岩が混じる粘土で作られた土器が伊勢崎市波志江中野面遺跡で確認されている(藤根・今村2001c)。つまり、藤岡産の粘土で作られた土器が伊勢崎まで運ばれている事実を示している。元総社西川遺跡のS字状口縁台付甕が榛名山系の粘土で作られた。波志江地区で出土したS字状口縁台付甕が藤岡産の粘土で作られた。このことが示すものは、すでに供給網があり、土器を作り運ぶという分業が確立していたということが理解できる。中宿の土で作られた土器と藤岡産の粘土で作られたS字状口縁台付甕は、群馬県域を移動し、榛名山系の別々の2か所の粘土で作られたS字状口縁台付甕が樽式土器と共伴する事実は、群馬県内での大きな需要と供給網が完備されていることがわかる。また産地の違う粘土で焼いたS字状口縁台付甕が、流通網に乗っていることが指摘できる。

横手早稲田遺跡のS字状口縁台付甕出土は、総点数81点この中の片岩が含まれるのは19点、全体の23.5%、片岩なし54点66.7%、不明瞭が8点9.9%である。S字状口縁台付甕の中で片岩が入るものは23.5%で、片岩を含まないものが最大数66.7%である。つまり片岩を含む藤岡産片岩を含む粘土以外で作られているS字状口縁台付甕が最大数なのである。これは藤岡産以外の粘土か、遺跡周辺の粘土であり、複数の粘土の土器が今の前橋市の遺跡で出土していることになる。



第5図 横手早稲田遺跡出土S字状口縁台付甕胎土

再度『魏志倭人伝』を引用するまでもなく、新保地域には弥生時代から古墳時代前期まで続いてきた「市」があり、元総社西川遺跡12号住居跡に住んでいた人たちが入植民だとすると「市」を管理する人は、古墳時代初頭期には入植民に入れ替わっていることになる。すでに管理者は入植民だったということになってしまう。遙か350kmから400kmを意図もなく歩いてきた人たちは何千・何万

人いたかは分からないが、瞬く間に「市」の奪取と供給網を奪いとり、どこに行けばS字状口縁台付甕にあう粘土があるかを見つけ出し、「市」で在地の土器を入手した。そして井野川流域の在地の人々は土地を取られ、「市」の供給網、「市」の管理権を奪われ、黙って村に迎え入れたのであろうか。それが卑弥呼以て死す、倭国内が乱れ「相誅殺すること千余人」と記載された時である。入植民はあっという間に榛名山系、藤岡、伊勢崎までの土地とすべての粘土の産地を奪い取り、群馬の地に新しい国を建国し、群馬県に古墳時代を造り、古墳王国を創建し、土地、国を奪い取り新文化が作られたのだろうか。「市」の管理をしていた群馬の人は弥生時代からの社会構造の中の人間である。弥生時代にすでにあった社会は崩壊したのだろうか。井野川流域の人々は捕虜とされ、奴隷とされたのだろうか。新保地域では鹿角製の鉄剣の柄が多量に出土している。新保地域での鉄の出土はないが鉄製の剣は管理されていただろう。群馬県域には多くの鉄、鉄剣が出土している。有馬遺跡・北町遺跡、八幡遺跡、石墨遺跡等々鉄剣や鉄製品が出土している。そして柄には新保地域に出土する鹿角製柄が装着されている。群馬の人は武器を所有していたのである。また新保地域には灼骨が出土し、中国の亀甲と同様の生活風俗が定着していた。『魏志倭人伝』にも倭国の風俗として記載されている。井野川流域をかこむ周囲に多くの集落があり、鉄剣を持った多くの弥生人が群馬に多くの集落を営んでいた事実を示している。彼らの腰には鉄剣が下げられていた。新保地域は広義の井野川流域にあたり、「市」を運営し、弥生時代から古墳時代へと集落と「市」は継続していた。そこへ350kmから400km彼方から昼夜を問わず獣を警戒し、他国の領土を侵犯し続けて「相誅殺」を繰り返してきた他国の人たちに、何故、「市」の管理者は「市」を与え「市」の供給網を与えたのだろうか。管理者がいたということは、管理を任せた群馬のリーダーもいたはずだし、ト骨があったということは、占いの祭りを管理遂行する人物もいたはずである。井野川流域の人々は350kmから400kmを超える道を徒歩で、歩ききった彼らにS字状口縁台付甕をつくるための粘土採掘の場所に案内し、藤岡にある複数の粘土の場所に案内し、波志江にある粘土採掘場を教えたのだろうか。井野川流域の人々は鉄剣も弓も使わず、すべてを与えた理由はなんであったのか。鉄剣を持った人々はなぜか入植民を群馬県に受け入れ、すべてを与えてどこかに旅立ったのだろうか。「相誅殺」の中、他国に入れば殺されるか、奴隷にされる時代に、そのようなことが出来るだろうか。しかし、そのさなか、並行して群馬の古墳時代の「市」は井野川流域と藤岡地域、さらに離れた場所の土でできたS字状口縁台付甕の流通供給網も機能していたのである。中居が指摘したように、すでに古墳時代初頭にはS字状口縁台付甕が在地化していて、

在地の土で作られていたのである(中居2016)。新保地域には大量の弓も保管管理され、骨鏃・石鏃が多数出土している。井野川流域は弥生時代中期から、群馬の人々が開拓した農耕社会が成立していた。豊かな地域である新保地域に豊富な「モノ」が管理され、豊かな農耕集落として安泰である。そこへ東海の人が350kmから400kmを歩ききり、来てすべてを瞬時に奪ったというのか。在地の群馬の人たちはすべてを失ったということは、筆者には理解できない大問題である。東海の間人が大挙してやってきただけではなく、彼らが群馬の古墳文化を築いたということは侵略されたことを意味している。卑弥呼が亡くなったところ、そんなことが起きれば、世の中は「相誅殺」の最中で、戦争が起きることになる。入植民説の立場に立てば、そう解釈しなければならない。新保地域の集落は、井野川流域の多くの遺跡には、戦闘が起こったことを示す殺傷人骨の出土もなく、「モノ」は管理され、様々な木器や武器である弓矢、鉄剣が管理されていたのである。有馬遺跡礫床墓からは鉄剣、青銅製釧、鉄製の釧が出土している。装飾品もガラス小玉200点以上、糸魚川産の翡翠製勾玉、新潟佐渡産の鉄石英製管玉が確認されている。有馬遺跡をはじめ群馬県域には、鹿角製の柄を持つ鉄剣を腰に下げていた人がいたのである。石墨遺跡周溝墓からも鉄剣が確認されている。つまり現在に近い群馬県域の多くの集落と新保地域の関係は「モノ」の供給先と考えられる。新保地域の「市」は武器である剣の柄を供給していた。伊勢崎地域では藤岡産胎土のS字状口縁台付甕や、元総社西川遺跡では榛名山系の胎土のS字状口縁台付甕も確認されている。現在の群馬県域を覆うほどの人たちがそれぞれの地で農耕集落を営み、お互いに交易をしていたことが理解できる。そんな中で、拠点的な「市」を持つ新保地域周辺に東海の人が来て集落を奪い、水田地を奪えば、橋口の指摘のように、戦争が起きなければならない緊張があったはずである。入植民説に立てば、このように理解しなければならない。群馬県ではS字状口縁台付甕はすでに在地化し、それも伊勢崎の土や藤岡や片岩を持たない土、榛名山系の複数地域の土でできたS字状口縁台付甕が供給されているのである。この供給網が分断され、停止された痕跡もなく、藤岡と伊勢崎への供給網が維持されている。そんな中、おおぜいの人が細い道を歩いてくれば、井野川流域の人々は周りから囲んで、矢を放ち、鉄剣を持って戦い、当時は戦士と農民は自分たちの土地を守ることが当たり前の農耕社会であり、戦闘は当たり前のことである。『魏志倭人伝』には国をつなぐ道は草木が繁茂し、前を行く人が見えないとの記載がある。地の利を持っている群馬の人たちは橋口が示したように、細い道の両側から矢を射かければ自分たちの土地を守れたはずだ。また井野川流域、県内域では戦闘や戦争を想起させる受傷人骨は全く出土して

いない。

何故東海西部から多くの人が井野川流域にこなければならぬのか。しかも徒歩で350kmから400kmを歩きぬき、何の理由、目的で井野川流域をめざしたのか。当時の群馬県域にはすでに「市」があり、新潟産の翡翠、さらに半島からの鉄製品、青銅製品が豊富に保管管理されていたのである。何故東海西部の水の豊かな平野の中で集落を拡張しないで、命の危険を賭して戦乱状態の倭国の細い道を一列になって旅立ってきたのだろうか。一度奪った国を捨て歩いてきたのだろうか。彼ら入植民は、なぜ獣への恐怖、戦闘への死の恐怖と戦い、長い旅を始めたのか。入植説に立つならば、ここから始めなければ事実と証明できない。群馬には戦闘、戦争などを示す殺傷人骨は出土していない。戦争の証拠もないし、350kmから400kmを歩ききった証明と、どれほどの人間が移動したのかも示さなければならない。さらにどのルートを徒歩で歩ききったのか、大人だけなのか、家族で移動したのか。入植目的での旅立ちであれば自分の土地を捨て、家族とも会えなくなるという決断が必要となる。入植説を唱えるならば様々な問題をきちんと整理し、実証しなければならないと筆者は考える。

7. 入植民はいなかった

ここまで、入植があったと言われる当時の社会情勢や、群馬県域内での供給網や、「モノ」の管理体制、交流の存在を考えてきた。入植民の存在がS字状口縁台付甕を主体とする、東海系土器という理由だけでは証明できない事も示した。S字状口縁台付甕自体も群馬の土で作られ、群馬県域内の供給網を使って運ばれている。すでにS字状口縁台付甕は在地化し、「市」を基軸とした需要と供給の社会が確立しているのである。つまり、S字状口縁台付甕は群馬の人々に人気のあった甕であることを示している。当時の群馬県の人々は自分たちでS字状口縁台付甕を作っていたことが証明されたのである。東海西部の土器があることを理由に、入植民の存在を証明することはできない。関東や長野県の遺跡では弥生時代から古墳時代にかけてS字状口縁台付甕が出土することは以前より指摘されていた(増井義巳1958・大塚初重・小林三郎1967)。さらに群馬県域では弥生時代は栗林式土器、古墳時代に入れば南関東系、畿内系、北陸系、新潟系、滋賀県の受口状口縁土器も確認されている。遠隔地、隣接地の「市」同士の交易も継続されているのである。確かにS字状口縁台付甕の人气が高かったが、筆者の集計では一番群馬で多く出土する甕は土師器平底甕である(友廣2015)。県内にはS字状口縁台付甕や外来系の土器を出土する遺跡がある。しかし、県内で東海系のみの土器セットを持つ遺構は数%も無いことは筆者が以前証明した(友廣2003・2015)。

群馬県の地は新保地域の鹿角製鉄剣の柄が有馬遺跡等で検出され、大きな範囲の中に「市」を確保していたのである。

八幡遺跡で礫床墓が1基確認され、鉄剣が出土し、有馬遺跡との関係が指摘できる。有馬遺跡では礫床墓群と壺棺墓や周溝墓も確認されている。筆者は群馬県域が広い範囲での交易圏でつながり、お互いの集団を認め合っていた。そうでなければ新保地域で制作した武器である鉄剣を交易しないと考える。筆者は同じ集落の墓域の中に異種の埋葬形態があることから通婚圏すら存在したと理解している。

特に入植民が来たとされる井野川流域では弥生時代中期から古墳時代前期にかけ、新保地域では「市」の機能が十分に充実していたことが指摘できる。群馬県の人たちは弥生時代中期から親子代々数百年をかけ井野川流域を開拓し、農耕社会を作ってきたのである。さらに付け加えれば、弥生時代後期に群馬県域内でしっかりした社会構造、供給網、経済網が発達成立していたことは間違いない。もし入植民が来て新たな社会を築き上げたのであれば、道中のすべての戦闘に勝ち抜かなければならない。何故350kmから400kmを歩きぬき、入植を果たしたのかを証明しなければならない。入植民説はすでに群馬県内で浸透し、一般の人にも伝わっている。県史や市町村史に書いてある。しかし、筆者はいまだに入植民の存在を証明する事実はないと指摘できる。入植民説が出されて50年以上が過ぎた。当時は樽式土器と石田川式土器は並立する弥生土器とされていた。樽式土器は榛名山、赤城山麓に分布し、石田川式土器は、群馬県南東平野部に分布する全く異なった、並立する異文化社会であるとされていた時代に生まれた説である。

両土器文化は全く接点、共通性や共伴例もないとされ、石田川式土器の出自は、群馬の地以外にあるとされていた。当時はS字状口縁台付甕が東海の土器とわかっておらず、九州で確認された例があるという時代であった。このため石田川遺跡報告書では入植民の故地は朝鮮半島をも視野に入れるべきとされていた時代である。古式土師器の研究は五領遺跡の発掘後、議論が活発化し、古墳時代が始まる前には、土師器と弥生土器が混在する時期があることを多くの研究者が示していた(岩崎卓也・玉口時雄1966等々)(註8)。その後群馬県内では関越自動車道、上越新幹線、上信越自動車道、北関東自動車道の大規模開発や県内道路整備等々の発掘調査に伴い、樽式土器と石田川式土器の共伴例が爆発的に増え、両土器文化は弥生時代から古墳時代へと継続して行く土器文化の過渡期であることが分かったのである。しかし、入植民説は継続した。筆者は新しい事実が発見されたときに新しい考えをだすべきと考えている。新しい事実を受け入れ、常に新しい方向に軌道修正すべきと考える(石川日

出志2013)。

筆者の考えは、当時の群馬県域の社会は広い通婚圏を持つ平和な社会であり、鹿角製の柄を持つ鉄剣を供給している社会である。それが戦闘の無かった根拠である。入植民説に立つのであれば、井野川流域にどれほどの人数が入ってきて、どのような社会を創立したという証明をする必要があると筆者は考える。井野川流域を基盤とした入植民はそこに建国したという新しい国の形を示すべきである。

8. 入植とは

1.「開拓する土地や植民地にはいつて生活すること」『岩波国語辞典』第四版 西尾 実 岩淵悦太郎 水谷静夫編 岩波書店 1989 ①

2.「植民地・開墾地にはいつて生活すること」『大きな活字の三省堂国語辞典』見坊豪紀(主幹) 金田一京助 金田一春彦 柴田 武 飛田良文編 三省堂 1992 ②

3.「開拓・植民のために他国または他郷に入ること。『広辞苑』第三版 新村 出編 岩波書店 1983 ③

植民とは

1.「本国以外の土地に移住・定着し経済的に開発すること。また、その移住民。(出典①)

2.「外国の新しい土地に移住して(イジュウ)して経済的に開拓すること(ひとびと)。「一政策」(出典②)

3.「ある国の国民または団体が本国と政治的従属関係にある土地に、永住の目的で移住・開拓し、経済的活動をすることまた、その移住民。」(出典③)

植民地とは

1.「ある国に(本土)からの移住者によって、新たに経済的に開発された土地。特に、新領土となって本国に従属する地域」(出典①)

2.「新しく属領となった外国の地域」(出典②)

3.「ある国の海外移住者によって新たに経済的に開発された地域。本国にとって原料供給地・商品市場・資本輸出地をなし、政治上も主権を有しない完全な属領。『広辞苑』第三版

新村 出編 岩波書店 1983 (出典③)

では、移住とは

1.「よその土地に移り住むこと」(出典①)

2.「よその土地・(海外)へうつりすむこと「ブラジル—一民」」(出典②)

3.「①他の土地または国へ移り住むこと。「一者」②開拓・征服などの目的で種族・民族などの集団が或る土地から他の土地へ移動・定住すること。」(出典③)

「開拓する土地」の指すものは、これから開拓する場所、つまり未開拓地や原野の事を指していることが分かる。

植民地を辞典で引いてみると、上記の通り、「特に、本国に従属する地域」・「新しく属領となった外国の地

域」・「②開拓・征服などの目的で種族・民族などの集団が或る土地から・・・」となる。従属する国とは属国である。

植民地の入植民とは他国に移り住み、開拓・征服を行い、経済開拓を行う。本国と属国の関係。

辞書を引くとこのようになる。つまり入植民とは本国と属国という意味が入ってくるのだ。

井野川流域は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、水田耕作を継続して開拓してきた土地で、多くの遺跡が分布する場所である。何も無いところを開拓するわけではなく、多くの水田や集落があり、「市」があり、管理者やリーダーがいて、卜骨を執り行う人間たちの社会が存在している場所である。そこに定着するには相当な軍事力、武力、更に大勢の人も必要である。群馬県域全体は藤岡、伊勢崎、高崎、前橋、沼田、渋川を含めた現在の群馬県域全体を網羅する供給流通網を想定させる社会構造がある。その中心地に入植するには当時の群馬県域の人口・武力、武器すべてを凌駕するほどの大軍勢が必要である。井野川流域だけではなく、供給網に囲まれた群馬県域全体には、鉄剣を腰に下げた多くの人がおり、入植民が井野川流域を奪うには在地の人口を超過ほどの人間が必要であると筆者は考える。さらに属国とした場合、治安維持等の警察力も必要であろう。軍隊も必要だろう。本国との行き来もしなくてはならない。入植民があったとする立場はそれを肯定し、東海の土器と同じ変遷をすると従前より主張する。そのためには不断で密接なる本国との連絡、土器の搬入や行き来をしなければならない。卑弥呼が亡くなって「相誅殺」の中でその作業をしなくては新たな国の建国は維持できないだろう。筆者は入植とは極めて重大な用語であり、簡単に使うべきではないと理解している(註9)。

9. 小結

ここまで群馬県域の当時の社会背景と、入植民の存在の可能性を述べてきた。現在のように群馬県に東海西部から多くの入植民が来て、群馬県が誇る古墳王国の基を作ったという説には、未だに承服できないでいる。現在の群馬県民も自分たちの古墳文化は東海から来た人が作り上げたという説には承服できかねると考える。しかし、この話は群馬県の研究者たちが説いている説なのである。しかも50年を超え、今でも定着している説である。その根拠が「S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器」である。入植説が生まれた時は、群馬県の弥生時代後期の樽式土器と同じ弥生時代の石田川式土器は並行して存在し、発掘調査例も少なく、共伴する例がなかった時代にできた説である。またS字状口縁台付甕が、どこの土器かも分っていなかった時にできた説である。現在では古墳時代前期に様々な地域の土器が共伴することは、汎

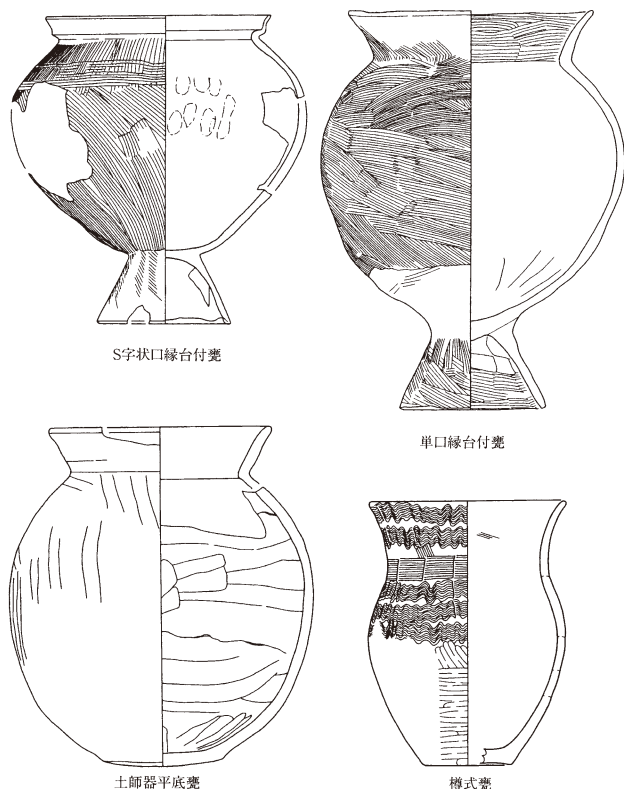
日本で当たり前のこととして受け止められている。東海の土器が群馬にあることは、普通のこととして受け入れられている。隣県の長野県でも東海系土器だけでなく、様々な地域から土器が混入している。中居が指摘したように、滋賀県の受口状土器も京都、日本海側や石川県にも波及し、三重県や愛知県にも達して在地化し、群馬県でも出土している。秋山が指摘した畿内の生駒山系の人に移住をしたとの可能性を示しているが、それはそれ以前からの密接な交流・交易の存在があったからこそ可能なのである。一方群馬県の入植民は350kmから400kmの距離を徒歩で歩き、様々な場所で戦闘を繰り返し、そのすべてに勝利しなければこれなかった人達である。全く次元の違う話である。入植民の存在の根拠が東海の土器がある、ということで理解できるのだろうか。戦乱の最中、『魏志倭人伝』にあるように、前を歩く人が見えないほどの草木が繁茂し、更に「倭の道は獣道のような」という道を、何千何万の人々は1列になって歩いてきたのだろうか。また弥生時代の戦闘を研究した橋口は戦闘には弓を射かけ傷を負わせ、刃物で殺傷するということを提示した。これは青谷上寺地遺跡の多数の殺傷人骨の出土から井上が証明した。青谷上寺地遺跡出土の頭蓋骨の損傷から弓の矢先傷や鋭利な刃物で殺傷された人骨が証明している。さらに橋口が説くように道の両側から矢を射かければ、ひとたまりもないだろう。新保地域の「市」には弓が保管され、石鏃、骨鏃が保管されていたのである。群馬の人々は鉄剣を持っている人もいたのである。また入植民は男だけなのだろうか、群馬の地にきて新たな古墳文化を作り上げた人たちには、家族はいなかったのだろうか。文化やS字状口縁台付甕を持ってきた人たちは群馬で結婚したのだろうか。筆者はすでに通婚域が想定できる社会も指摘した。そんな社会にきて結婚することは略奪しかないだろう、そして戦争になる。入植民は「相誅殺」の世界の中を、なぜ井野川流域にきたのだろうか。東海西部の平野部の未開拓の土地を開拓した方が安全であり、大和のように周辺の交流している人々ともうまくやっていけばよかったはずであろう。

入植説では東海西部と定期的に連絡を取っているという説もある。その理由は群馬県のS字状口縁台付甕が東海西部地域と同じ変遷を持つという理由である。しかし、そんなに遠いところからきて土器を運んだりすることも命がけの作業である。350kmから400km離れた本国から、命をかけて土器を運ぶのである。さらに故地の土器変遷をおなじくするならば、毎日でも人が行き来しなければならぬ。それは数人では成り立たない、他国の領土を侵犯すれば、殺傷されるか、捕まれば奴隷にされる。入植後土器を取りに行くなら、毎日が戦争になってしまう。土器を運ぶために連日戦争を繰り返していたら体は疲弊し、もともと群馬に住んでいた人たちとの抗争も毎日繰

り返すことになる。群馬県域の在地に住んでいた人たちは、すでにS字状口縁台付甕を自分たちで作り使っていたのである。群馬在地の人たちがS字状口縁台付甕を欲しければ、群馬県内で焼いた甕を「市」で入手するか、変わったものが欲しければ、交流のある、科野の「市」に行ってもってくれば安全で、楽であろう。また藤岡産S字状口縁台付甕、波志江産S字状口縁台付甕、榛名山系の粘土のS字状口縁台付甕を「市」に行って手に入れば問題は無い。なぜなら新保地域の「市」は健在で弥生時代から古墳時代前期にかけて健全に機能していたのである。入植民が存在したことと「市」が途切れず、機能したことは大いに矛盾してしまう話である。350kmから400km歩いて運ぶ必要はない。群馬の地にはS字状口縁台付甕があふれていたのである。入植民説には、群馬県の樽式土器文化の人々は井野川流域を手放し、山麓地に集落を移動したとする研究者もいる。しかし、よそ者の入植民たちが粘土や木、鹿や猪を狩りに来たら、耕地を奪われただけでなく森も奪われ、どうしていたのか。群馬の人たちはよそ者が来たら、耕地を捨て、水利権を捨て、森を奪われ、隠れて逃げていたのだろうか。この間も新保地域の「市」では猪、鹿の肩甲骨は備蓄され、卜骨が行われ、鹿角も備蓄され、鉄剣の柄、木製農具も作られていたのである。

入植民たちはどのような社会階層の人々なのか、井野川流域を奪い、群馬に古墳文化を築くためには首長、文化人、権力者、奴隷、戦士、土器・工具職人、市の管理者等々様々な階層の人間が必要となる。そして東海西部と同じ土器変遷を維持し、S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器を構成するためには、かなり頻繁に行き来し、S字状口縁台付甕をもってくるか、職人層をも連れてきて作らせねばならない。他人の土地で山に入り粘土を取るためには職人を守る戦士や警備する人がいなければ仕事はできない。他国の土地を侵犯し、歩き回り、土器を作ったり、焼いたりすれば在地の人に襲われる覚悟も必要である。入植民は群馬県域の社会構造や「市」の供給網の管理権を奪ったのだろうか、一体どれほどの人間と様々な社会階層の人間が来て社会経済を奪ったのだろうか。もし、それを可能とするならば、社会構造内の人間がすべて入れ替わらなければ不可能と筆者は考える。新保地域の「市」は弥生時代中期から古墳時代前期に継続していた。「市」の管理者・リーダーは殺傷されたのだろうか。それを証明しなければならぬ。当時の社会の中でそのようなことが起こったのならば、「相誅殺」の社会では戦争しかありえないと筆者は考える。戦争は農耕社会の常道であり、当たり前の選択である。

入植民存在の唯一の根拠である、『S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器』の存在を再度検証しよう。第6図にあるように調理器具であるS字状口縁台付甕しかもない住居跡は井野川流域では13%、単口縁台



第6図 甕4種の例

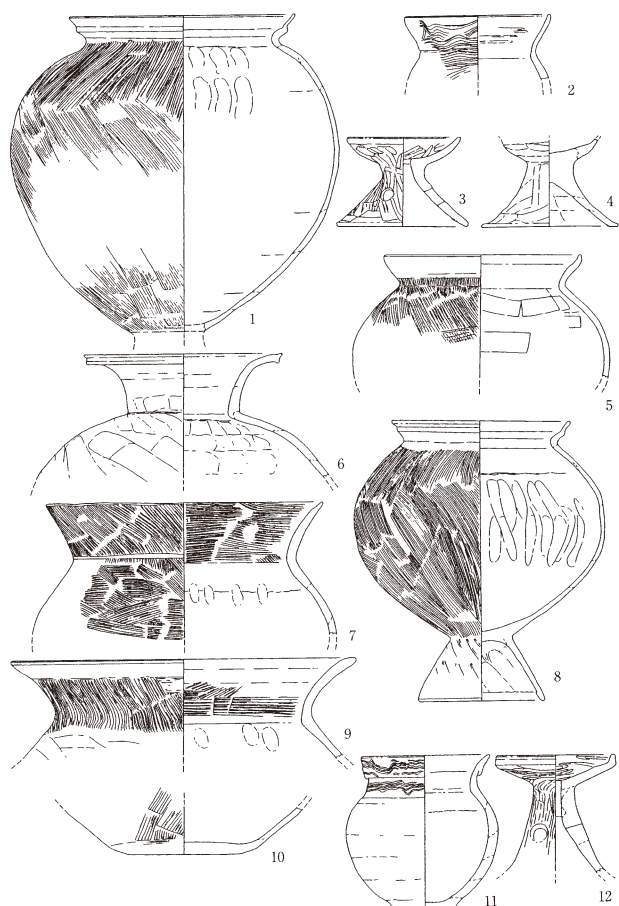
付甕1%、土師器平底甕3%、樽式土器甕2%である。つまり井野川流域全体の竪穴建物では81%の住居跡に住む人間が複数器種の甕を所有している(註10)。入植があったとされる、井野川流域内での統計である(第2・3表)。入植民の唯一の根拠である『S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器』この事実が示す構成の土器群は、井野川流域にはほとんど存在していない事実を示している。入植民の集落は存在していないという証明である。さらに群馬県内でS字状口縁台付甕がつくられ、さまざまな粘土が使用されている。東海西部と同じ変遷をたどることもない。また樽式土器の混在使用も認められる。甕はここに示した4器種が混在して出土しているのである。群馬県内で出土する土器は、汎日本的な、他地域同様多器種の土器群が混在する普通の社会であった。

結論は群馬に入植民は存在せず、人が入れ替わることはなかったのである。人が入れ替わったのでなければ、『S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器』にならない。当然群馬県古墳社会・文化はもともとの群馬県内の弥生社会を維持していた樽式土器文化の在地社会の発展であり、群馬県域の人たちが作り上げた社会構造が「市」を中心として、交流・交易をしていた社会の上に成り立っているのである。群馬在地の土器、樽式土器は弥生土器から土師器と混在し、古墳時代を迎える。樽式土器は徐々に土師器化している。

さらに第2表井野川流域最大のS字状口縁台付甕を出土した遺跡下佐野遺跡を見よう。37棟の竪穴建物が確認されている。S字状口縁台付甕のみを持つ竪穴建物が15棟確認され、遺跡内で40.5%である。このうちS字状口縁台付甕だけが出土甕で、共伴遺物が無い竪穴建物が3棟ある。他に北陸系土器と共伴する竪穴建物が6棟、16号竪穴建物からは北陸系甕5の字口縁甕が共伴している。さらに畿内系小形埴と共伴する竪穴建物が4棟ある。そしてS字状口縁台付甕を持たない竪穴建物が2棟存在している。下佐野遺跡では129個体のS字状口縁台付甕が報告書に掲載されているが、7区45号竪穴建物から25個体、A区74号竪穴建物で7個体、B区12a号竪穴建物で9個体、C1号竪穴建物から15個体のS字状口縁台付甕が出土し、この4棟の総計は56個体になる。4棟だけで下佐野遺跡内のS字状口縁台付甕の43.4%になる。4棟の平均は1棟で14個体になる。この4棟の共通する特徴は他の器種の甕、壺や他の土器の量も多いということである。4棟を抜かした33棟のS字状口縁台付甕の1棟平均は2.2個体、日常生活には充分である。ではこの4棟は、なぜこんなに持っているかという、筆者の考えでは井野川流域の新保地域としての機能をもっていると考えている。集落内にある「市」である。したがって下佐野遺跡集落内「市」の備蓄品である。つまりS字状口縁台付甕は群馬の人たちにとって、人気があったのである。しかし、S字状口縁台付甕をもたない人もいるし、単口縁台付甕、樽式土器甕、北陸系甕様々な系譜の土器が混在するのである。さらに墓出土土器にも触れておきたい。入植民たちが東海西部から来て、群馬の土器が『S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器』に変えたということが入植民存在の根拠となるが、日常生活の土器が一変させられたとする。そこまでこだわった入植民たちがいるとすれば亡くなった時に供献された土器を示したい。第7図は入植民が入植した、井野川流域最大のS字状口縁台付甕が出土した下佐野遺跡7区3・4号周溝墓の土器である。S字状口縁台付甕、土師器平底甕とともに、樽式土器が出土している。かつて五領遺跡で多くの考古学者が指摘した前代の弥生土器と新たな土師器が共伴している。日常生活の土器にこだわるが、死に及んで在地の樽式土器を捧げたということであろうか。入植者は死に及んで故地の土器を持たされなかったというのだろうか。筆者は被葬者が井野川流域で生まれ、亡くなった在地の人と考える。これが入植地とされた井野川流域での土器出土状態の実態である。

S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器を持つといわれている集落の実態である。

元総社西川遺跡では4棟の弥生時代から古墳時代前期の竪穴建物を確認した。しかしS字状口縁台付甕をもつ竪穴建物は3棟で、6号竪穴建物から11個体のS字状口



(2と11が樽式土器)

第7図 下佐野遺跡7区3号周溝墓(1~10)・
4号周溝墓出土遺物(11・12)(1/6)

緑台付甕が出土し、8号竪穴建物から1点、そして入植があったことを指摘した12号住居跡から2点、共伴遺物は樽式土器の壺である。筆者は入植民の集落ではないと考える(第4図)。

ここまで土器の出土状態を確認してきた。県内最終的甕の集計は第8図である。S字状口縁台付甕と土師器平底甕は拮抗するが、土師器平底甕が42%、S字状口縁台付甕が38%、単口縁台付甕10%、樽式土器甕が10%である。これを数量ではなく出土した甕別に延べ軒数を見ると土師器平底甕が43%、S字状口縁台付甕32%、単口縁台付甕15%、樽式土器甕が10%になる。S字状口縁台付甕より土師器平底甕が数量、延べ軒数がまさっている。「S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群」は存在していない。

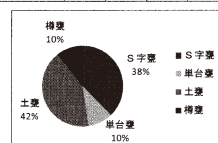
各集落内での備蓄品としての存在はあるが、実用品としての甕は伝統的な土師器平底甕が主体と言える。これが入植民がいたとされる群馬県域の実態である。つまり、井野川流域に住んでいる人たちは決してS字状口縁台付甕のみの生活をえらんでいない。S字状口縁台付甕以外

表2 下佐野遺跡の住居跡出土土器

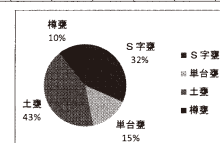
住居跡	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	壺	高坏	器台	埴	他	総数	備考
A 35号	3		4		1	1				9	土甕の1つはS字九底甕
36号	2		1						1	4	
38号	2									2	
39号	2									2	
72号	2						2			4	北陸系器台
73号	1									1	
74号	7		2		3	5			4	21	駿河壺・小形高坏・稜高坏
B区4C号	1		1			2				4	
4 d号	2	1								3	
6号	4									4	
8号	2		2							4	
9 d号	2	1								3	
10 a号	3		4		3	5	1		1	17	ひさご壺
12 a号	9				3		3			15	北陸系器台
12 b号	2		2		1					5	ひさご壺
16号	3		2		3	2	1			11	北陸甕5の字
17号	1							1		2	小形埴
24号	2									2	
25号	3		2							5	
28号			4		1	1			2	8	赤井戸壺
31号	3				1					4	
41 a号	6				1	3				10	
C 1号	15				4	3	4			26	稜高坏
2 b号		1	1							2	
10号	5		1		3		2	1		12	北陸壺・小形埴
13号	2							1		3	ひさご壺
II地区											
6区9号	4				3	3				10	玉造住居跡
7区22号	1		1		1					3	壺赤彩・玉造り
24号	3	1	2		6	1	3			16	玉造り・北陸器台
30号	1				2	1	1	1	1	8	S字鉢・小形埴・玉造り
41号	1		1		3	1		1		7	小形埴
6区20号	2		1		2	1				6	ひさご壺
22号	1		1		2	2	1			7	二重口縁壺
7区25号	2				2	2	1			7	ひさご・パレス壺
45号	25		10		17	8	6	2	2	70	ひさご・小形埴・北陸器台 二重口縁壺(東海)
48号	4		1		6	1			1	13	
56号	1				2		1			4	赤彩器台
37軒	129	4	43		70	42	26	8	12	334	
延べ軒数	35	4	19	0							

表3 46遺跡集計

遺跡名	S字甕	単台甕	土甕	樽甕	壺	高坏	器台	埴	他	総数	備考
龍野・雨笠遺跡	6	12	13	8	39	70	10	55.7	15.3	30.7	33.3
新保遺跡	43	16	44	12	115	229	24	50.2	37.9	13.9	38.2
新保田中村前遺跡	24	1	19	15	59	111	14	79.3	27.3	1.1	21.6
八幡遺跡	44	9	28	12	93	178	19	52.2	47.3	9.6	30.1
高崎情報団地遺跡	35	4	16	2	57	126	25	45.2	61.4	7	28
保渡田遺跡Ⅶ	11	8	10	7	36	72	9	50	30.5	22.2	27.7
食賀野万福寺遺跡	19	1	4	0	24	48	5	50	79.1	4.1	16.6
下齊田・滝川遺跡	11	11	25	0	47	99	3	47.5	23.4	23.4	53.1
下佐野遺跡	129	4	43	0	176	334	37	52.7	73.2	2.2	24.4
舟橋遺跡	11	0	5	0	16	33	6	48.5	68.7	0	31.2
元総社西川遺跡	14	3	2	1	20	32	4	62.5	70	15	10
勝島川端遺跡	72	4	45	16	137	206	43	66.5	52.5	2.9	32.8
内堀遺跡	23	21	61	46	151	376	50	40.1	15.2	13.9	40.4
荒砥上ノ坊遺跡	5	9	69	21	104	269	28	38.6	4.8	8.6	66.3
荒砥原前遺跡	1	8	14	0	23	61	7	37.7	4.3	34.8	60.9
荒砥島原遺跡	8	3	4	0	15	31	7	48.3	53.3	20	26.6
荒砥二ノ塚遺跡	26	7	6	0	39	72	12	54.1	66.6	17.9	15.4
飯土井上組遺跡	7	2	7	0	16	51	2	31.4	43.8	12.5	43.8
芳賀田遺跡	35	8	38	0	81	194	37	41.7	43.2	9.8	46.9
横後遺跡	14	19	73	2	108	298	32	36.2	13	17.6	67.6
柳久保遺跡	19	3	28	0	50	102	10	49	38	6	56
村主・谷津遺跡	0	5	29	20	54	161	20	33.5	0	9.3	53.7
鶴谷遺跡群Ⅱ	1	0	1	1	3	25	2	12	33.3	0	33.3
下郷Ⅱ	0	1	22	7	30	97	11	30.9	0	3.3	73.3
下郷Ⅰ	26	28	112	3	169	401	41	42.1	15.4	16.6	66.3
荒砥頭跡Ⅱ西Ⅰ遺跡	54	42	123	0	219	512	29	42.8	24.7	19.2	56.2
東原Ⅱ遺跡	2	3	31	10	46	91	19	50.5	4.3	6.5	67.4
御正作遺跡	246	11	64	0	321	624	30	51.4	76.6	3.4	19.9
下田中遺跡	54	7	46	0	107	206	25	51.9	50.5	6.5	43
中溝遺跡	73	6	74	0	153	291	46	52.5	47.7	3.9	48.4
三和工業団地遺跡	87	40	128	0	255	572	88	44.6	34.1	15.7	50.2
赤堀村鹿島遺跡	0	6	6	0	12	43	3	27.9	0	50	50
五目井清水田遺跡	30	2	4	0	36	67	7	53.7	83.3	5.5	11.1
波志江中野面遺跡	51	2	28	1	82	204	25	40.1	62.2	2.4	34.1
光仙房遺跡	18	7	23	0	48	111	8	43.2	37.5	14.6	47.9
有馬遺跡	2	3	70	43	118	198	23	59.6	1.6	2.5	59.3
石墨遺跡	1	0	5	15	21	42	3	50	4.7	0	23.8
見立溜井遺跡	0	0	10	13	23	49	5	46.9	0	43.5	56.5
糸井宮前遺跡	22	1	46	17	86	170	26	50.6	25.6	1.2	53.5
戸神諏訪遺跡	13	7	77	54	151	299	40	50.5	8.6	4.6	50.1
門前橋跡・外溝戸遺跡	2	0	5	27	34	81	7	41.9	5.9	0	14.7
北町遺跡	273	5	131	61	470	890	42	53.9	58	1	27.9
東八木阿曾岡南現堂遺跡	1	7	14	21	43	91	11	47.2	2.3	16.3	32.6
堀ノ内遺跡	16	10	8	0	34	75	13	45.3	47	29.4	23.5
土之手八王子遺跡	27	3	3	0	33	79	16	44	81.8	9	9
舞台遺跡	88	89	209	0	386	932	94	41.4	22.8	23	54
46遺跡計	1644	438	1823	435	4340	9303	1018	46.6	37.6	10	41.7



第8図 46遺跡の甕出土率



第9図 46遺跡の延べ軒数

の複数種の甕を所有していることがわかる。さらに畿内系小形埴、北陸系甕、南関東系単口縁台付甕、樽式土器甕が混在して出土している。

入植民の歩いてきた道を考えてみよう。入植説にはどの道を通り、井野川流域に来了という道すじは示されていない。『魏志倭人伝』にあるように、道を歩けばどこかの国へ出てしまう。道なき道では迷ってしまうし、獣に襲われる。350km以上離れた井野川流域をめざすには道案内もいるだろう。何日かかったのか、どこで食料や水を調達したのか他国の「市」で調達はできないだろう。大勢の人が歩いていけば地域の集団のリーダーに連絡が入るだろう。すぐに矢が飛んでくるかもしれない。入植民は何人いたのか、構成員は男だけなのか、子供や家族はどうしたのか。もし家族がいたとすれば入植のために出発したら、一緒に来ないと一生会えなくなるわけである。一緒に歩いてきても、途中親が獣や戦闘で殺傷されれば子供や家族はどうなるのか。「相誅殺」の最中である。他国の人と出会えば、当然戦闘になり、命のやり取りである。逆に考えると井野川流域の人が東海西部に行く道を知っているだろうか。安濃川は現在の三重県津市にある。筆者がネットで調べると歩いていくには約380kmである。現代のルートは長野県に入り、長野を南東に向かい愛知へ入り、名古屋を抜け三重県津市に到達する。これは最短の道である。道というのはすべて国道、県道を歩く道である。舗装された国道・県道を歩いても時間は約80時間と出る。当時は1700年前、全く国道・県道は無い時である。誰か井野川流域への行き方を承知していたのだろうか。当然道は存在していないはずだ。入植前に何度も下見に来ていたのだろうか。名古屋は愛知県である、白石が言う狗奴国を抜けなくてはならない。長野は群馬とは交流があるところであり、武器を持った入植民が通れば、すぐに群馬のリーダーに連絡があるはずであろう。それ以前に狗奴国との戦闘、抗争が始まるはずである。入植民は地図もなく何故井野川流域を目指すことが出来たのか。その後も長期にわたり継続的に交流を維持できたのか。その都度、戦闘を繰り返さねばならないのである。筆者は今、津へ歩いて行けと言われれば地図を頼りに、コンビニを頼りに何日かかるであろうか。途中で、何度も道を聞き、携帯電話、スマホ、ホテルが無ければ行くことはできない。食料や洗濯も必要であろう。1700年前どれほどの人が列を組み昼夜を問わず獣と対峙し、他国民と戦闘を繰り返す敵地を歩くことが出来たのだろうか。1700年前、獣相手の戦い、他国との戦争を繰り返し井野川流域に到達することは不可能であると考え。また梅澤が指摘した、現在の東京湾から舟で利根川を遡上し、群馬の地に来了というのはどうであろう。愛知から東に向かい狗奴国、高尾山古墳の領地、静岡の沼津で交戦し、次は中里遺跡の集落そして小倉が指摘した神奈

川の環濠集落群を制覇しなければならない。また東京近辺で舟を調達しなければならない。船を持つ集落を攻撃して奪わねばならない。そうでなければ安濃川から舟で行くか、舟を担いでこなければならない。舟で来れば東京湾に入る前、神奈川県三浦半島にある赤坂遺跡の領海を侵犯することになる。赤坂遺跡の集団は、舟を使い海の交流を行っていたと考えられ、その最盛期は弥生時代後期後半にある。彼らは入植民たちよりも操船に熟練している。東京湾につく前にも海岸には海の民の集団もいたはずである。東京湾にたどり着いた後も川を遡上すれば川で漁をする集団もいたはずである。更に現在の利根川はなく、平野部を多くの小河川が乱流していれば、舟の航行が可能であったのが問題になる。大きな船は進まないであろう。そうなれば何隻の船が必要なのだろうか。迷路が広がる河川のどの流れを行けば、井野川流域に到着するのかわかっていただろうか。もし当時の群馬の人たちが東海西部に行くとしても一度国を出れば、交流のある科野の「市」へはいけるだろう。しかし、それから先は交流の少ない国や他集団の中を進まねばならない。すべての戦闘に勝利し、突破しなくてはならない。当時の群馬の人々は東海西部の土地を目指さずに、目の前の周りの人と交流がある群馬の地で新たな土地を見つけ、開拓した方が安全であり、常道である。自分の集団の周辺を新たに開拓する選択をすれば、危険に身をさらさず、命を奪われることもない。

井野川流域に集落を構成していた人たちの土器様式は「S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群」ではない。これがここでの結論である。結果はここに示した。従来言われていたような入植後も母集団がいる東海地方西部と密接に関係を保ち、S字状口縁台付甕を運んできたということも「相誅殺」の中、命がけのことになる。またすでに群馬ではS字状口縁台付甕は在地に定着し、様々な場所で作られていたのである。ここまで検討したように、やはり群馬には入植民はいなかったし、入植という行為は存在していない。弥生時代中期に一気に井野川流域の平野を耕し始めた群馬県域の人間を含め、弥生時代からの人々が築き上げた社会なのである。群馬県に古墳王国を建国したのは他国の民ではない。

10. さいごに

筆者は長い間入植という問題を考えてきた。入植があった前提で検討もして来たが、それは成功しなかった。交流の結果、「モノ」や技術などに伴う人の行き来も当然あったと思うが、近隣の国や交流の密な集団同士だけである。また邪馬台国と狗奴国の抗争から逃れるという説もある。しかし、周囲は「相誅殺」の最中である。ここまで述べたように、他国の集団と出会えば今までより、危険が自分の身に降りかかるわけで、さらに危険な

場所に身をさらすことになる。農耕社会の中で自分の集団から離れることは、死ぬまで死の危険にさらされることを覚悟しなければならない。一度集団から離れば、武器を持たねばいつ矢が飛んでくるか、あるいは狼やクマに襲われることになる。新しい集団にも簡単には入れない。これは難民説で入植とは言わない。

入植という言葉は現代社会の中で考えると、極めて恐ろしいことだと思いつながら、群馬で生きてきた。自分では入植民はいなかったと考え、様々な拙文の中で主張してきたが、入植民説は群馬では今も定説となっている。

筆者は常に冷静に考えてきたつもりである。周りの人や他県の方々にも拙文を読んでいただいた。それなりの感想もいただき、ある程度の評価も受けた。しかし、入植民説は50年以上をかけ、いまだに一般の県民の方たちにまで深く浸透し、受け入れられている。

筆者は有馬遺跡の調査を担当した。井野川流域の新保田中村前遺跡の調査も担当した。両遺跡とも弥生時代から古墳時代へ継続していく遺跡である。弥生時代後期から古墳時代前期への竪穴建物、周溝墓や土器の自然な継続変換を目の当たりにした。勿論樽式土器は土師器と混在し、ゆっくりと土師器化していた。無文化した樽式土器も存在していた。

また筆者は金井東裏遺跡・金井下新田遺跡の現場担当者として定年を迎えた。この間、金井東裏遺跡の古墳人の人骨を調査し、弥生時代中期の再葬墓も掘った。金井では弥生時代中期の再葬墓から後期の礫床墓に継続し、ここでも後期に入植を受けて混乱した様子は伺えなかった。金井東裏の未盗掘の1・2号古墳の主体部を開けた。小札甲や馬具も目の当たりにした。金井東裏遺跡を終了させ、下新田遺跡の囲状遺構検出の場にもいたし、調査を毎日続けた。感動の毎日であった。金井東裏遺跡、金井下新田遺跡でも弥生時代から古墳時代へと蹂躪され混乱した痕跡はなく、土器が一夜にして変換した様子もなく、何ら他県と異なる時代変換の形態を認めることはできなかった。

従って、自分としては渋川市の黒井峯遺跡、中筋遺跡、前橋市の天神山古墳、高崎市の観音山古墳、金井東裏遺跡・金井下新田遺跡という群馬を代表する古墳文化、群馬県の古墳王国を築いた人たちが、かつて東海西部から400kmを歩いてきた人たち、他国からの入植民の末裔との理解はできていない。

本小文は、平成29年度公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究活動事業を受けたものである。

(註1)筆者は以前から新保遺跡、新保田中村前遺跡、日高遺跡を合わせて新保地域とよんでいる。それは3遺跡が隣接し、新保遺跡と新保田中村前遺跡では両遺跡で同じ溝が確認された。日高遺跡では角座骨が付く鹿角が出土し、鹿狩りが認められた。新保田中村前遺跡では鹿角が大量に出土している。鹿や猪の肩甲骨もまとまって出土している。日高遺跡では新保田中村前遺跡同様、木器が出土している。これらのことから筆者は同じ集団のムラであると理解している。(友廣2003a・2015等)

(註2)榎は群馬の植生の中で希少で、筆者は交易品と考えている。県内の遺跡報告書を見ても榎の植生は極めて低いことがわかる。木材も加工した痕跡が伺え、備蓄してある。

(註3)井野川流域には弥生時代中期から後期につながる遺跡が多数確認されている。県内では新保地域同様の「市」をもつ集落もさらに増える可能性がある。

(註4)新保地域では鹿角や鹿角製柄の未製品も多数出土し、製品には柄と中子を合わせる目釘穴も存在し、鉄剣が無いと穴の位置が合わず、鉄が管理されていた可能性が高いと考えられる。

(註5)井上に指摘したのは隣り合う骨が異なる人体であるという。さらに殺傷の痕跡が骨にあること、これは死者が平和な社会で、埋葬されたのではないことを示している。戦争による死者と言える。

(註6)前半でも述べたように農耕社会内では常に戦闘が起こる。しかし、群馬の現在の伊勢崎市、藤岡市の土でできたS字状口縁台付甕が前橋市の遺跡内で出土する。新保地域から鉄剣の供給や土器が運ばれていた。そのど真ん中の井野川流域の耕地に全く知らない入植民の集団が入ってくれば、在地の人は耕地を守るため、水路を守るため、「市」に備蓄した弓矢を持ち、鉄剣を持ち、自分達の土地を守るため戦うだろう。農耕社会では当然のことである。筆者は戦争が起きるのは必至であると考える。

(註7)大木は詳細に土器の技法を検討し、S字状口縁台付甕の技法は樽式土器のものとは大きく異なることを指摘した。しかし、検討したS字状口縁台付甕は在地の土で作られた、在地化した土器である。交流は「モノ」だけではなく、ト骨の習慣や技術の伝播もあると筆者は考える。

(註8)五領遺跡調査が始まり古式土師研究が大きく進化した。土師器研究者の多くは、古墳時代への胎動としてまず弥生土器と土師器が共伴する時期を設定した。この意見は多くの研究者が賛同した。

(註9)1993年太田市で「石田川遺跡を考えるシンポジウム」があった。当時私も出かけ岩崎卓也先生の講演を聞かせていただいた。その時の話の中で先生が『考古学者たるもの入植という言葉を経々しく使ってはならない』とおっしゃったのを覚えている。

(註10)群馬の古墳時代前期に出土する煮炊き具甕の種類である(第6図)。

筆者は4種に分け、S字状口縁台付甕東海系、単口縁台付甕南関東系、土師器平底甕、樽式土器の系譜をひく弥生土器の伝統の甕、そして樽式土器である。つまり樽式土器と土師器平底甕が群馬の弥生時代の伝統を持つ甕と考えている。

引用・参考文献

- 秋山浩三2017「弥生時代のモノとムラ」新泉社
石川日出志2013「考古学研究の近現代史・学史を！」みずほ別冊『弥生研究の群像』一七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念—大和弥生の会 20～30頁
石丸淳史2005「上野地域の古墳時代前期における土器制作の様相」『古文化談叢』54九州古文化研究会 51～78頁
井上唯雄・梅澤重昭・松島榮治・松本浩一他1990「第4章 弥生時代・第5章 古墳時代」『群馬県史』通史編1 163～174頁
井上貴央2009「鳥取発！青谷上寺地遺跡の弥生人—その骨や脳が語るもの」プレストレスコンクリート技術協会第18回シンポジウム論文集(1)～(3)頁
岩崎卓也・玉口時雄1966「土師器」『日本原子美術』6 講談社 146～148頁
内野那奈2016「受傷人骨からみた縄文の争い」『立命館文学』立命館大学人文学会 472～485頁
梅澤重昭1971『土師式土器集成』
大木紳一郎1980『庚塚・上・雷遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
大木紳一郎1994「2号河川出土弥生土器について」『新保田中村前遺跡Ⅳ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団272～274頁
大木紳一郎2001「第5章 まとめ [1]元総社西川遺跡出土の古墳時代前

- 期の土器について』『元総社西川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団105～117頁
- 大塚初重・小林三郎1967「群馬県高林遺跡の調査」『考古学集刊』第3巻第4号 東京考古学会 57～76頁
- 小倉淳一2017「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営期間」『法政考古学』第43集 1～40頁
- 尾崎喜佐雄1971「弥生文化」『前橋市史』第1巻
- 柿沼恵介1999 新編『高崎市史』資料編1 原始古代Ⅰ 高崎市史編さん委員会
- 金子浩昌1986「新保遺跡出土の脊椎動物依存体・骨格牙製品」『新保遺跡Ⅳ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 神戸聖語1989『八幡遺跡』高崎市教育委員会
- 齋藤利昭2001『横手早稲田遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 下城 正1994『新保田中村前遺跡Ⅳ』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 仁藤敦史2016「卑弥呼の「共立」と魏王朝・公孫氏政権」『纏向発見と邪馬台国の全貌』角川文化振興財団92～119頁
- 高橋龍三郎2001総論：「村落と社会の考古学」『現代の考古学6』株式会社朝倉書店
- 高橋龍三郎2016「縄文後・晩期におけるトーテミズムの可能性について」『古代』第138号 早稲田大学考古学会 75～141頁
- 田口一郎1981『元島名將軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 友廣哲也2003「古墳社会の成立—北関東の弥生・古墳時代の地域間交流—」『日本考古学』第16号 日本考古学協会 53～92頁
- 友廣哲也2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
- 友廣哲也2017「群馬に入植民はいなかった」『研究紀要』35 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団49～61頁
- 豊島直博2005『弥生時代鉄製刀剣』奈良文化財研究所
- 豊島直博2010研究論集16『鉄製武器の流通と初期国家形成』奈良文化財研究所
- 中居和志2016「丹後半島周辺の受口状口縁土器の動態」『京都府埋蔵文化財論集』第7集143～152頁
- 野島 永2010「弥生時代における鉄器保有の一樣相—九州・中国地方の集落遺跡を中心として」『公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター』41～54頁
- 野島 永2014「研究史からみた弥生時代の鉄器文化 鉄が果たした役割の実像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集 183～212頁
- 橋口達也2007『弥生時代の戦い』雄山閣
- 橋本博文2016「越後平野南東部の古墳時代」『新潟県考古学講演会(第2回)』発表要旨
- 深澤敦仁1999「石田川遺跡」『群馬県遺跡大事典』20～21頁 上毛新聞社
- 藤根 久・今村美智子2001a「土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 262～277頁
- 藤根 久・今村美智子2001b「S字状口縁台付甕胎土材料」『元総社西川遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 95～104頁
- 藤根 久・今村美智子2001c「波志江中野面遺跡出土土器および粘土類の材料分析」『波志江中野面遺跡(1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 355～365頁
- 増井義巳1958「いわゆる古式土師器の問題」『考古学手帖』5 3～4頁
- 松島榮治・尾崎喜佐雄・今井新次1967『石田川』石田川遺跡刊行会
- 水田 稔・石北直樹1985『石墨遺跡』沼田市教育委員会
- 水野 祐1998「魏志倭人伝現代語訳」『魏志倭人伝と邪馬台国』武光誠編 読売ぶっくれっとNo.10
- 宮崎重雄1993「新保田中村前遺跡の獣骨」『新保田中村前遺跡Ⅲ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 163～174頁
- 若狭 徹1990「井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態」『群馬文化』220 群馬県地域文化研究協議会 55～70頁
- 若狭 徹1998「群馬の弥生土器が終わるとき」『人が動く・土器も動く』41～43頁 かみつけの里博物館
- 若狭 徹2007『古墳時代の水利社会研究』学生社